

【演奏家にとっての《第9》】

ベートーヴェンの醍醐味はフーガ！

ピアニスト

小山実稚恵（こやま みちえ）

《第9》は、初めて聴いたのがいつか覚えていないくらい、もの心ついた時から耳にしていた曲で、大学に入ってから暮れになると東京文化会館によく通いました。日本においては、それぐらい「風習」とも言えるほど、季節と曲が密接に結びついてしまった特殊な作品だと思います。

ピアニストにとって、ベートーヴェンの交響曲はとても大きな意味を持っています。そこには、ベートーヴェンの音楽のエキスをすべて入っているからです。ピアノもオーケストラ並みに和声を奏でられる楽器なので、オーケストラの曲をピアノで弾いたらどんな響きになるのか、いつも興味があります。ベートーヴェンのシンフォニーやベルリオーズの《幻想交響曲》なら、リストがピアノ用に編曲した楽譜で弾いてみます。《第9》もリストが編曲した版があって、「ここがホルン」「ここがティンパニ」「ここは弦楽器のトレモロだろうな」と、

イマジネーションをはたらかせながら弾くのです。実際、作曲家がピアノを使ってオーケストラ曲を作曲したり、オーケストラ曲がピアノ曲として編曲されることは多いので、ピアノとシンフォニーの世界はとても近いのです。

ベートーヴェンの音楽がピアノ曲でも、室内楽曲や交響曲でも、「魂」が体に響いてくるのは同じです。個人的に交響曲では《第5～8番》が好きですが、ベートーヴェンの何がすごいといたら、あのフーガではないでしょうか！《第9》の最後にも出てくる壮大なフーガを聴くとき、そこにはバッハやハイドンの音楽の流れを強く感じます。バッハが作曲家として再発見されて有名になったのは、ロマン派になってからですが、ベートーヴェンはそれ以前に、フーガをヨーロッパ音楽の伝統の中から学びとり、自分の音楽の中で“王道”として押さえています。耳や体が悪くなっていっ

ても精神を集中させていくことで、自分の中でそれを“やりくり”しながら音楽を昇華させていったのですね。

新しいことをする人には、そればかりが目につくこともあります。ベートーヴェンの音楽が“新しいこと”と“王道”を同時に備えているところは、本当に「お見事！」としか言いようがありません。ベートーヴェン以後の大作作曲家たちが、作品の中の「ここが勝負！」という部分でフーガを使っているのは、みなそれを倣っているのではないのでしょうか。《第9》では、大きな曲特有ともいえる、さらさらとした始まりの第1楽章冒頭に、「これからどうなるのかな」と期待させられますが、やっぱり醍醐味は第4楽章。聴いている自分が、音楽と一緒に進んでいく感じがたまりません。



©Hideki Otsuka

東京芸術大学、同大学院修了。1982年チャイコフスキー国際コンクール第3位、1985年ショパン国際ピアノコンクール第4位に入賞。2004年ロン＝ティボー国際音楽コンクールの審査員。人気、実力ともに日本を代表するトップ・ピアニストである。